

令和6年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文



中学校の部 最優秀賞

亡き祖母から学んだ「多文化共生」

二本松市立小浜中学校

3年 湊 砂奈

今年、父方の祖母が亡くなった。大好きな祖母の死は、私に大きな喪失感を与えた。葬儀の時、祖母の友人の弔辞の中に、「英語が上手だった」、「日本語教室を開いていた」という話があった。私は、全く知らない話だったのでとても驚いた。葬儀が終わり、父に詳しく話を聞いてみた。すると、ホームステイの受け入れの登録をしていたそうだ。滞在していた外国の方とは、独学で身に付けた英語を使って話をしていたらしい。家には国際電話もかかってきていたという。

私は現在、学校の学習で特に英語に力を入れ、英語検定にも積極的に挑戦している。いつか海外で生活したい、海外で活躍したいという憧れがあるからだ。そんな私にとって、生前の祖母が積極的に行っていた外国の方との「共生」についての取り組みにとっても興味が湧いた。

まず、当時の頃を知る家族にいろいろと話を聞いてみた。父は、中学二年生の時に自宅に滞在していたオーストラリア出身の男子高校生と仲がよくなったと話していた。二人でビデオゲームをして楽しんだそうだ。私は、オーストラリアの十七歳の少年と日本の十四歳の少年が、一体どのようにして意思疎通をしていたのか大いに気になった。父は、中学校で学習した英語で、拙いながらも日常会話はできていたと話していた。しかし、言葉の壁はある程度超えられたとして、国籍も、文化も違う相手と「仲良く」なるというのは、なかなかハードルが高いのではないだろうか。

祖母が開いていた日本語教室には、近所の人にも講師として参加していたそうだ。中には英語ができない人もいたという。当時、我が家にはさまざまな国の人が滞在し、また、出入りしていたそうで、近所の人はその様子に驚いていた。そもそも、祖母が日本語教室を始めたのは、当時の二本松市には、嫁いでくる外国人の方が増えてきていたことが理由の一つだったようだ。「日常生活で困らないようにサポートしたい」という思いで始めたのだという。二本松に暮らす外国の方の中には、この取り組みのおかげで不自由することなく、日本になじんで生活することができていると感じている方もいるのではないかと思う。

国籍や言語、文化、風習など、自分とは異なる背景をもつ人との距離を縮めるためには、双方が共有できる言語やツールが必要なのだろう。だが、理解するという以前に、自分と全く違う環境で生まれ育ち、確立されたアイデンティティをもった人を受け入れる体制を整えるのは容易ではない。初めのうちは、抵抗感がある人が多いのではないかと思う。では、なぜ父は、オーストラリアの少年と互いを受け入れることができたのだろうか。祖母は、多国籍の方々との交流に抵抗感はなかったのだろうか。

実は、父も初めの頃はなかなかなじめなかったそうだ。しかし、一緒にごはんを食べたり、

遊んだり、同じ時間を過ごすことで、少しずつ受け入れることができるようになったという。生活を共にする中で、人種や国籍、文化的背景など関係なく、互いを一人の人間として認め合い、対等な関係を築くことができたのだろう。

今、世界では、人種差別や迫害などの問題が起きている。私が着目したのは、「世界で最も迫害された少数民族」と呼ばれるロヒンギャ難民に関わる問題だ。ミャンマー国内の九割が仏教徒であるのに対して、少数派のイスラム教徒であるロヒンギャは、宗教や見た目、言語の違いから不法移民と見なされ、国籍を認められないなど、差別されてきた。過激な仏教徒集団によるイスラム教徒排斥の動きが強まり、ロヒンギャの武装勢力が警察を襲撃したことをきっかけとして人権侵害が加速したのだ。ロヒンギャは、国軍からの武力弾圧から逃れるため、難民となった。

こうした問題の根本的な要因として、私は、互いを理解しようとしていないということが挙げられると考える。「自分たちとは明らかに違う」と決めつけて、異質な存在として捉えている。皆同じ一人の人間であるという考えがないように思えてならない。肌の色が違う、言語が違う、宗教が違う、性別が違う。そうした凝り固まった意識から生まれるのは、人種差別という不合理だ。

祖母のように、たとえ母国語が英語でなくとも、言葉が通じなくても、身振り手振りを加えながら相手を知ろうとしたり、相手に自分のことを知ってもらおうとしたりすることこそがコミュニケーションであるはずだ。そのようにして、いろいろな価値観をもつ人と関わることで、得られる経験があり、新たな考え方に気付くことができる。それぞれの人がもっているバックグラウンドが違うからこそ生まれる考え方や感じ方の違いも含めて、相手を理解しようとするのが大切なのである。

ロヒンギャ難民の受け入れを行っているバングラデシュでは、自分が貧しいにも関わらず、食料や衣服を持ち寄る人も多いそうだ。一方で、ミャンマーでは、軍事クーデターによって国軍からの攻撃や弾圧を受けたミャンマー国民の中には、自分たちの現状が、かつてロヒンギャに対して行ったことと変わらないということに気付いた人もいるという。悲劇はなかったことにはできないけれど、相手の立場になって考えることで自分にできることを考え行動に移したり、自らの過ちに気付いて正すことができたりする人々がいるということに救いを感じる。

自分と違う文化をもった人々に対する差別や偏見が生じるのは、一方的な決めつけが大きな原因であろう。自分と他者に違うところはあって当然だ。同時に、自分と同じように、一人の人間としての人生があるのだ。それらは決して傷つけられていいものではない。違いを受け入れ、認め合い、尊重することこそ、互いが共生していくために必要なことなのだ。

参考文献

- 「ロヒンギャ難民とは？問題の原因や彼らの生活、必要な支援について詳しく解説」
https://gooddo.jp/magazine/peace-justice/refugees/rohingya_refugees/
- 「ロヒンギャへの謝罪相次ぐ、国民意識に変化」
<https://www.nna.jp/news/2181698>